俳諧一義集

後編

三

へ 5
4393
8

門へ5
4393
8

昭和九年七月二日購求

中央図書

帝国図書館蔵書

俳諧一葉集遺稿之部

古学庵佛兮 編
幻窓湖中 編
坎窩久蔵 校

一格手入て格を出るはなれ校く又格に入るはなれ彩色はけ
格に入格をはなれてはなれて自在を以て詩歌文章を集ひ
き向上の一路を拓て仏祖を西海に発てはなれ
一手業不易一対法
一代門の句八彩色のてとし赤門の句八墨絵のてとく
てと彩色の手ふれとはふれ代門手かてとてきひまを
写代弟一とす

帝国図書館蔵

一名人ハ地をよく調へしおもふ所に花をもたせ秀句を作る
上手ハ作らぬ所におもしろき所あり
一蕉翁俳諧第一に味ふべし
一古集撰集などをこゝろざし手本とすべし
一蕉門の俳諧を学ぶに先翁の俳諧の骨髄を得の骨の
日積みの功をこゝろ得て甚深信木越(?)説すべし 其句ハ時代と
をも考ふべし
一初心のうちハ句数を多く吐べし それより姿情をかんがへ大
山をこえて向の林へ下る心を兼べし 六尺をこえんとする
ものハまづ七尺をこえんと心得べし 初心言ともに好みをはなれて入やすから
ん心得き時ハ古人の胸中をおしはかるべし
一俳諧ハ中人以下此ものとはるまじれハ俗語平話をもて其旨を
俗談平話をもちゐんに猶誹諧の雅なる所をも俳諧に究
むるハ誹諧ますます尊し 俳諧ハ菊栄集のやし されハ貴く卑しく賤
しきも味ふべし 老も唐明すべて中華の豪傑をも恥ず
利 此道の心やすきを恥とす
一まづ手をとる為あし家を求るにハ第一の風雅を味ひ
一季の康末なることをしるべし 句の姿ハ青柳の小雨に乱れ
たるごとく おりて微風に柳やなぎしをらしく情をもち
書くに花をとふものの女の月を詠むべし 附心ハ詩月秋子梅花
のちからをしるべし
太の深し 祖翁曰決とぞ
一或人翁に問ふ 其句ハ宗祇の詠をわれハわれにてすく
体ひとつをおもとしぬ 說ハ何御いづれのなかにもあるし

菊ひとえのひとえ　はなやかなる人は、さてうち思ひ御はせ者ものを
聖ことさらに、人をそれて、全のうつくしう八月頃にて、油おとしを置るれ
ばそれ者の枝引かなうつくしゆうて、ゆくと所うてそこおのれ枝く
はかうそ色ふかうして、泥手ふつく枝をかる賞良八つれ
てゆくへくもゆかしく、香八全面をたんとを回はと又枝ゆし
きことはう況や蝶掃こそ枝をこそ多くして
情れなるさあり、松八保生の事ひとつ月生てつけきこて
笑ゆれ一とを大和海ふる物とをとつれ多ふ
まうけをうかうしてゆのやをうんとまるる村
鶏来ていをふ砂山八ひとかをこうる法ものをく仰ふ
うれとゆかゆひたすむかまるの法手貴為のおをつれく
ふをうをとを人さ

芳仲さく為てうれをつや芳の花
ゆをうはをうひをる香をうこれくおをゆをれをのけ
枝の芳花をいそん
一　秋の仲の芳さいやをまをて海をあるこの屋八新をう
秋八こをうをおをろ　ほをあるこの屋八新をう
方を沿ーさゆうをあるこの沢歩為の枝をれをうて也ゆ
ーふをうを古をを詠る為の日稲為やくをけををとの入
為よく人の知れ八を仲の為るをいそんれて為自のけき
をーを香合仲為のをんをうを
いれつをや開の方ゆくを仲の為
山里を芳宋本おををー　梅花
菊をを宋仲自をおをれ千返絵を仲自を二義を為

[illegible]

[illegible]

[illegible]

看板を見てはくらんの時なれば[illegible]

すゑそくくらんの事なれば[illegible]

こくひはくらん病の実なれば[illegible]

一菊尚白そのかたちはいかなる花山河なりとも[illegible]

久しきうき越向ひさせ[illegible]

[illegible]

[illegible]

旬中の[illegible]

[illegible]

[illegible]

一今年貞享の古式をあらためあらたに[illegible]

[illegible]

文芸月花の世を定るの也

校五ヶ條

一月花　一旬

一出合　一連

一短冊　一行序

一書香　一序跋

一諸礼　　侍止

芭蕉庵桃青判

一諸礼停止

一出合を近但あり先

一一句一直　主月花一句

右之ゝ源斎式也　芭蕉庵桃青書之

行脚疑

一あるゝ事ゝ所ゝ所ゝ再有すべし樹い石上千陰とも

ゆゝあるゝ物ゝ思ひ出ふ

一旅すゝ後ゝ遠き物の命をゝゝゝゝふれ

一君父の離言ゆゝ忘ゝ門外ゝ迷ゝ何ゝ天をいゝゝゝゝる

思ひゝゝ情ゆゝれハし

一衣装迷財を面ゝすゝ　ゝゝゝゝゝゝゝゝ見ゝゝゝゝ

程ゆゝし

一魚ゝ獣の肉を喰ゝ時ゝ人ゝの口ゝ美食弥味千ゝ分る人ハ

仏事ゝ与れ安ゝものし菜根を咬ゝ百事を思ふ人ハ

ゝゝおゝゝ

一人のゝゝ死ゝゝ色ゝ句をゝゝゝゝ空ゝ消ゝ鉢ゝ

ゝゝゝゝ説ハ説千ゆゝ関千苦ゝゝハゝゝ

一ゝゝゝ人ハ煩悩の焼ゝゝゝ所ゝ者の命をおこゝゝゝ苦ゝハ

中道ゝ陰ゝ

一ゝ冬ゝ苦ゝ子ゝ寒ゝ一枝の枯枝をこゝ疲御ゝ

一勇て酒を飲へうに郷食庶すまで問結しかくるの徴醍
みしく止て処手おうくれ梯るく祇果の戒分手聽を
問まと破を見へ先ハし酒手者さうの別を結もくるし
一船物系代をうまくうふく
一他の組を屋をもの長を家をて多のれ人を誹るものを
ほうもも甚いや
一俳諧のお鈴伝すくうふく雑話もれハ居賊して芳を養へ
一女性の俳友まうしもうふく師ま来るとしうぬてよりの
ハ者を新発をハ人をまして侍の一処る男女の色ハ開を言
るもう流落されハ心敷一るに山道ハ主一学道をしや
ものう能おのれく有くし
一主ひう物ハ一枚一草をうふく山川江ほうまを

ほうまを
一山川田沼をうく身入ハ一新をの者を付るをもれ
一一字の師息をうをまをまをのれ一句の理をまを俳
をれ人の沼をまるをもうれ人を者ハ色をあ者ハ海のも
一一布一枚のをまおるをまをうおるを一ふうさやをを又婚姻
をまれれ形のをまくの人ハ妻の奴ハ此をを入をのハ氏を
人を文をくし
一分を思ひ見をおを一一且芳のり郷ををを八ふ及ばを
をまをうを人を芳を亜をまをのれ主ハをれハ跡をを
社をを思一一を麁食ををををもを

右の酒く赤門の形郷ハ結ものを尺をを此の狭
ををを郷すを俳宿一人を別一不を亟を美を俳を

利歌の為手伝をもて世をうる法師しらぬや或は
古人の名を変名色の縁のよりどころとして八体
手跡をうけて物間を変の流をしたの変をし

一 逢坂関の清水 伊勢 後撰 菊

菊原川を清水の文字に白さんの海ゆ流れの為
ゆとし言葉を物又八代の後撰に伊勢の後撰八元の
式のをゆ歌ふ歌を作代をいひ光孝の光孝の
を和歌中をさきをうの歌を作れをゆ菊逢の
法の歌をうるを今日神のかしこをゆうをおもひ
いく逢結和歌の詞を後撰の一字を冷し清涼のうるき
き歌茅を歌をさきをうるを

一 かるさらの杉を紙をうる 菊

伊尺の伝右衛の編ゆ世衛のうるを八ゆ山衛の
世白をうるを衛の中をを伝ゆ八白切迫れ八をしうを伝
をとし号九をうを衛の中をを八世衛ゆ菊ゆ又是八中三す白し
いを世白をうれ中ゆ中を是八白無為偽をを世白
ををを物いれ中三八白等を清を白中白等を清をれ八
中二をををうん菊をを白世衛を中を菊をれ印屋し多を
出花をを杉の紙をを世をしるをしのをを
一歳をを杉をを中の杉をを紙をを菊白方すの中を分衛
れいををををみやまの八伝を詞をを白をををの中を
をを尺を伝出服をおををれをををれを
一歳人沙の杉を時れ白を切ををを紙世衛を節を世衛

白文にて切字のてにをは決て白文にて弱めるて
菊日赤ハ切字のてにをはて赤の字ハ白
ゆゑに只服部の言葉画きまゝにて毛数これの形
ようにて白文にて此白文にて立てるてゆゑの白文にて
言葉こゝにてこゝにて

一　ゆくゝゝをゆくをにはお人とをこゝる

菊日尚白の新く近江八幡波まゝ多ハ行まゝ
ようゆいてゆゑ作ゝ和さ事ゝ尚白ゝ新味ゝゆゑ繁雑
とこゝまゝ情ゝ作ゝ俳ゝ今日の言葉ゝ
菊日ゝ古人ゝ作ゝ俳ゝ
らにゝ言葉ゝ一言ゝ徹し行まゝ近江ゝ張ゝ
此新のまゝ人行青新波ゝ人さハ事ゝ此情

風流の人ゝ蕉翁ゝ
風雅ゝ作ゝ俳ゝ菊日ハ
一　此本戸口　孫のさ　此　月　扶角
孤蓑撰の対此白ゝ古ハ行ゝ
作ゝ俳ゝ
此ゝ人ゝ俳ゝ菊日ゝ
此角ゝ俳ゝ入集ゝ
此本ゝ
ゝ白ゝ大切ゝ
外ゝ言葉ゝ此白ゝ等ゝ
見ゝ諸門ゝ
いゝ外ゝ言葉ゝ角ゝ

一　[illegible]　伊勢　萩子

[illegible]

一　本[illegible]　伊勢　萩子

本[illegible]

一　[illegible]　伊勢　萩子

[illegible]

一　[illegible]　伊勢　萩子

[illegible]

ふさしひかるる人の冠と草しさ人句ちくしてうらし

一　おく楫　ふ句ちれ　ちう部　乙　野水

籠ちの楫の時き本ち此句ハ海の此を楫ちしうしかけ
ちと同者し入集ちとうらし翁曰望ちの籠ちしうしちと
本ち海のうしの籠ちまちしうしうしうしうしうしうしうしうし
はち掛り　翁曰句のちちちちちちちちはいしハ一ちの掛り望ち
ちと文はちちちと入ち入ち楫者のちちちちと弥ちとれを
除ち作る

一　ちう本ち故五前ち文ち楫うめ　秋人

翁き本ち作て曰芭句ハ蕉ちちされハきの句ちはうし秋人
句歌ち蕉ちちちと尺句ちと文ちみちち本ちち句故帳ち
籠ちち楫ちちるうしう有新勿明ちち至ちかやの

芭句ちちち　世上かちちめちちち思の代ち引うみち第五と
別ち作る所ち本ち句者ち此句ち歌ち蕉ち句ち
おいちハちまちうちちちち屋ちちちちち

一　振茶　やらいちち　ち手の　敷　ち本

ち本ち此句ハちう迫ふちちち作ちち五文字古烏帽ち敬
名ちちちちち系物ハちい心徹ちちうちちちやいちやの敷
ハちうちちちと今の冠ちち豆ち句ひうれハ翁曰ち文字ちちち
ち豆ハ作ちう人の茶やちちちちちちち振茶ちち楫思
ちちちちちちちちちと

一　四の座ちちれ豆　作ちちひゆく者ちの乱　万乎

此句初ハ翁の茶ちちち乱ちう句ち楫の射ん乱ちち
此句尺ちちれ　隆ちちちちち　ち本ち座ちち至ちち作ひゆく者ち

光閑の松の青色風姿ゆたかにして菊四月北国一樹八
重いろをんな青伊賀の道中の句千鳥千鳥ゆきてそれを豆
一さく此句とおもふんとして驚千方乎の句とおもふ

一　大きをおもふ人〳〵年はかりをおもふ　凡兆

元の文字忘れてしまふ白し青木の花に貴白重れ
し信濃の笑顔と笑へし花を踏人の地をとはし青木の物
うれあり迦陵の古人祝をおもふ一さゆるをやちりをを惜く
人をうらみ山外を引きもいるを身命のきをを及び
梅と冥小野て青の敵とうるやう海写をなるをん信濃
行へをを青を菊沖をうハ信濃の初をゆ
とれ〳〵千鳥ん船大事を寝とす菊四月をを花一百をを青
の敵しいをを重をるものの信と大笑ひ

一　我弱き用元うるし花の葉　青来

菊四月花の葉とハ知れ長所ある〳〵や古人を寄のをを荘
や信れをとくを初二さ行を拙をををををを

月雪や折しを花を甚しを　我人

雪しの拙の舟青木を浦を信舟の句千鶴を信ををを
ゆををれや折月をを我人の句入集ゆ月信をん菊四
月雪を以て信を一百句をを花一百をを風姿ゆ山走
我をゆをれやをを二つを八拙ゆをを我叩の信舟を以
千鳥向をを信舟を以句をを信れハむ青を思ゆ〳〵又
ををゆて折をあるんをを

きをれる雪をを雪の沾　世角

青木師を舟て世角八沾千信老を信をを門を雪の吟

侍るにや此論ハ其角を評して日来かれハ定家の卿
なりさしてもなき事をことごとしくいひつらね侍るとおほし
猶詳ならず候

一　をとゝひハあの山こえつ花ざかり　去来

これハ猿みのゝ二三年以前の吟也翁曰此句を出す人あるまじ一両
年中にハしとし其後杜国が徒と芳野行脚しけるにさそふ
去来への文に旅ハよしのゝ花の山より或ハしらぬ
所にて魂をうばゝれ又ハ其角がさくらさくらめでしとかしに
まうでとられて芽吹句もふかくにたくとまつひハあの山古
えつとかへ吟しけり但し去来ハ手放さず人も
くけれバ今一両年ふりてしといひてしあのひけん予ハ後
きてさるみのと

一　病がんの夜さむに落て旅ね哉　翁
　泉郎が家ハ小えびにまじるいとゞ哉
猿みのゝ撰の時此うち一句入集すべしと也凡兆云病雁ハさる事なれ
ども小鰕にまじるいとゞハ句のかけり事新しくさもに有
なんと云去来ハ小えびの句ハ珍しといへども其物を案じたる
時ハ予がたやすくもいはん病雁ハ格高く趣かすかにしていか
でか爰を案じつけんと論じ終に両句ともに乞て入集す其
後翁曰病雁を小えびなどゝ同じごとくに論じけりやと笑ひ
給ひけり

一　岩はなや爰にもひとり月の客　去来
先師上洛の時去来曰洒堂ハ此句を月の猿と申侍れど予
ハ客の方まさりなんと申す先師曰猿とハ何事ぞ汝此句を

いつ由てひさしく化さるゝや　を末といふ名月に乗して山形をめくり給ふて
岩沼より又ひらく鐘音を尺付ならとす沼田ニてかひらく肩
の宗とおのれと名のりもあはれなりけりくはしくの風体をつらぬ自
称の句とあまた入し此句は余も珍重して発句の小文字に入りなりけん
古本にありと趣向は称二三字にもて侍る所にしかの文を以尺に入八
おし柱先の筵てちるや退るゝ者のすめる有称の句とめし、是ハ柱先
の称にやらひ　ゆくしめ此句両にまちしてと見侍るも化出
それ取てしるさるゝ発句の小文ハ師の自撰の集に名をもつてけるを
去るゝを尺れ草稿にあつて近化せしめかゝるはけるハ今の常句
何句も集に入侍るやと思ふ沼田余河入発句の小文集に入句とる
おもしろのハまれなれハ此さかのことをとこそといし

一　くつくさり　草み六の　声さゝ　るゝ　　丈草

一　菊詠坊の病中に入て此翁の句をすゝめて今日より余花坊の句
一字のあやまりにつらなれとして業くの咄とおかしく侍りけれとも
此一句のみ文字を未されとも宝永の古本にも有りは今に残り
勅に侍らぬ毎を歎し集を撰て世にとゞめんやと此頃まて
初めて此句を知侍りける

一　二の冬や　雪つむ上に　夜の雨　　凡兆
此句初めに評判し菊をはしめいろくと是侍て此評を批点あつか
凡兆ニと言ていはく直兄に菊日ん凡兆ゟ物に此評を示之し
もしおさるものゝ初しは余二段低侍まゝ之を云ことし古本に此夜文字の
よみなとハ後しても知侍れと此歌に入りしといへるも知侍らん
此ころ何門の人も得侍るハ後はさくれと何に評を至りしかるに
至りしものハ文字をしまたをもしらずめんとせひ侍るとし

一　あきしみ霧にゆく方や何の月　去来

此句ハ初め霧に有明としてとくを言ハ去来初め山
路やかうて行とせしも此句は秋の二字の字を撰はるゝ
やしなひしのよしとおもけ此句ハ霧の字を難しらず先師ハ古人もなく
去れハ誰かめぐりて此人より山に入康の註次なくる萩の上風
とこよ見ても和歌優美の上に作かしかけり何とも觧かは
自他の上にも出る発句の字をえし化ミんハ更にその論なるに一句
初しめられハ去をくしく案じめぐれとしとのくに許なくしもと
去来も桂花に此句ハ都たるもつゝろとぞなる俳諧大ち
の和歌の同案らしいよして称をはゝと去れ候とて

一　京の某の此句してや人ほ尺に是等尾張の人の句
其の某の句風に一筋嘲むまうし吹き寄せなどと謗るに此
句を語りて彼白蕪句ハ行のごとく隠しかくして上世ちりのに語りて此
ともしき者側まで申し大に感動し移て蕪句とさもの意を作り彼を
此頃其のかろうてる去来ある予ハみて宗の其事になるまや此すす
作文くれくおこそ解答もいとかえなけれとし

一　三此外句作りしてけんや糸さくら

一　菊路上りて去来に語りて曰此はや世の両の集に此句いかかに申し
入集しけんとし去来こ各様の十分に吹きる所究よくて得ぬ
手作りにや為回いひ続きて何ゆ何る去来こたにおいて肝に銘
すさまじく此語り其句よき也ふともしおもて候去れ十とても

まきとよき中に養てかならる月　去来

一　魚町まさかりて時の句に翁曰此句を非さる也近頃功者すしと出
いひやめられしるる去来ならぬ人々と申して子ふにて也自の上手

[illegible]

一　泥亀や昔代水は嗜しつつ　史邦

[illegible]

一　[illegible]　宗次

[illegible]

一　玉椿のおくゆかしや　[illegible]

[illegible]

一　メまとみ　[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]

一　はつ〻ゆのみる併のうらけやまゝ　くるけ　湖力

[illegible]

一　[illegible]の一句併の句　吉帆に　帆　吉庵

[illegible]

兄弟北京元金[illegible]　吉庵

[illegible]

一　おりとおりとの　おりとの　橋　[illegible]

[illegible]

一 仕付けとよくたゝまれぬやうにかけしかたちにて
おのしてゝ後ろくしとゆひ直して仕さし申候所の
句ゆゑ八三十樺ゆゑ八仕付のけたゝまれ直すくしとゆひ合の五文字
ゆゑなるべし

一 梅 うすしめれ枝の百 吉来

これハ素直の根しゑ箱根にて曰く梅ハ三月のゆゑなるべし吉来
千とせ経て素直の服ゆゑ用ひらるべし

一 舟 うし 新玉の 玉の 玉根の 白し

海に浮て遠き所へ行ものゆゑ舟ハ白しと吉来 箱曰
とハ悪しきものゆゑ白きゆゑ仕付る是ハ悪しきゆゑ箱かゝ
上京の時吉来 箱曰 悪しきゆゑ仕付る 箱曰 舟の中ゆゑ
ゆゑ八三しゆのゆゑ

一 張 仕 角 さし 吉来 箱曰 有の 中 吉来

吉来の句ゆゑ悪しきゆゑ箱曰 悪しゆゑ仕付る 箱曰 角さし
張といへるゆゑ一百 吉来

一 ちゝ 荷 ふくしゆ ふくしゆ 九九

そもゝ八悪しきゆゑ尿業のゆゑ 箱曰 きゝ 悪しゆゑ
と百歌ゆゑ二句ゆゑ 箱曰 ふくしゆ二句なくてゆゑ
ゆゑなし

一 夢 よゝ きゝ 仕 身を 弱 す 仕 吉来

夢八きゝ仕ゆゑ弱すゆゑ吉来 箱曰 きゝ 仕ゆゑ
ゆゑ箱曰 八次のゆゑ同じゆゑなしゆゑ次のゆゑ

一 ぬん とめけ ふる 他の 業 ゆ 変

吹もゆゑ箱 梅のかゝるゆゑ 箱

此句句ぬし付き来る所の句を付けるに付句をなすべきはかく付るべし

一　くろこと言ふ　楼の本　は　森

咲ながらちるさくら門を入り　菊

此句句ぬし付き来る句全く楼の本の森をとるべき世

事をなすべしふるくて志を付るべきなり　句ぬしの付

句を先なれば付べきなり

一　綾　は　紅葉　つるの毛

注　くちなしの色ふかくもみぢ　吉来

此句句ぬし付き来る句を付あくべき句なれば上の句の紅

ふかくしてよく吉来られをやはり此句を付るべき

好青を上句の形をかへ句ぬし直門の流儀孫抜

ふるさと越す

一　ふるさとの　秋　は　正美

中さんしゅ中きりのくつ有　新子　吉来

正美年の中立しはじめて竹抜る新子はまだ自然と

付付るべき句ぬし付ハ斧正のひろう世新菊吉来と作

也深年立ハ世子菊曰と秋くしめて正美年ハ今年改定ふ

れハ我句ハ秋ふかくしとなる世受性すくふるし今上我句と

先ハ秋抜をえらハ早くもすくなしとなる一枝の花といふ

ひろハ我句ぬし不無子付るべ秋抜の秋ハ秋菊句ぬしの

す二ツ子ことをけしてなるべきまくと行のひやう

中三付るべ句ぬしのけしもて抜ぬ未詠のまれとなるべ

[illegible]

一　[illegible]
　　[illegible]　吉本
　　[illegible]　翁

一　[illegible]
　　[illegible]　史邦

一　[illegible]
　　[illegible]　吉本

[illegible]

一　[illegible]
　　[illegible]　翁

一　[illegible]
　　[illegible]　性然

[illegible]

一卯七ニ歩句ニ切字ヲ入ル事ハ句ノ本ニ成ル所ニ自分ニ定ル所ニ
曰句ノ本ニ成ル事ハ一句ノ本ニ成ル所ニ
附句ハ敷ノ事ハ大切ニ成ル事ハ全ク
ニ成ル事ハ歩句ノ結ビ句ハ切字ノ
なり是ヲ侍従ト云ハ又ハ侍ヲ初ル
ア子詠ニ成ル所ニ成ル所ニ

ニ成ル事ハ一句ノ本ニ成ル事ハ句ノ本ニ成ル事ハ句ノ本ニ成ル事ハ
入ル句ニ成ル事ハ切字ヲ以テ成ル句ハ
きれさきれさきれさる仕方の切字の数を定る
ハ定字を入る時ハ十七八ハ外のてうの切字ハ二三句ハ入て切
きる句又入ル事ハ切字ハ
ニ成ル事ハ一句ニ成ル事ハ
侍従ハ句ハ切字ハ成ル事ハ
ハ十七字ハ句ハ三十一字ハ
四十八字ハ切字ハ
ハ句ハ切字ハ
一卯七ニ結ビ句ハ句ハ本ニ成ル
ヲ横ニ横ニ横ニ成ル事ハ

とゝ一面ハさるとき花鋏等の如花けとゝ
やうにとゝやうにやうにやうにといつてやうにあるを見ぬ
そのうへにとゝ思ひ付るもしゆ曰されこゝ古ハ四本のうち一な
を横し流りとゝやうにとゝ有ふたりとゝ
されと書ものの横うしハ多くゝ流ふんしゝ手ふきゝ
脇一ぐんゝ吹そうとゝ吹ハ自然とゝ吹び
すひろう
一卯七月的を蓮門とゝ也一日ゝ拵ふハ的の古本等
ゝ曰ゝとゝ二のゝ沙曰古ハ是の白ふきとゝ勅ふ二日以
上ふ白とゝなるゝれ式の法と一日ゝ拵ふハ大切の是白と
接拵ふゝんハ的ゝとゝ二説ゝ是ハ法場和尚の白ゝれハ
一日ゝ拵ふゝんゝとゝ大切ゝ拵ゝ一日

まゝ拵ふゝとゝ大切ゝ拵ふゝ沙おゝ拵ゝ若ハ是一日
ゝれハおゝの他是ハふゝ是ゝ是ゝ拵ふゝ接拵ゝ又三十筋百
筋ゝ是白ゝ拵ふゝれ是ハ二本ゝ是ゝ拵ふゝ和ゝ是ゝ
ゝ大切ゝ拵ふゝれ是白ゝ拵ふゝ二日一ゝ拵ふゝれハ
幸ゝ拵ふ拵ゝ是白ゝれ又ゝ是白ゝ拵ふ
拵ふゝ一ゝ不拵ゝ是白ゝ拵ふ
二日ゝ是白ゝ拵ふ拵ふゝ拵ふ時ハ
拵ふゝ拵ふ拵ふ拵ふ拵ふ拵ふ
拵ふ拵ふ拵ふ拵ふ拵ふ拵ふ
拵ふ拵ふ拵ふ拵ふ拵ふ拵ふ
古人の死人ゝ拵ふ拵ふ
拵ふ拵ふ拵ふ拵ふ拵ふ拵ふ

一所七ヶ条門弟書閉じて用ひ侍やうを書きけるは墨
を流川の筆と書閉の白むくらゆは日書筆と白中と用ひんは
あり手用の白をんは拙くして五手有り用ひさて白
白をんをくふんとも白次の用を書を入るべしと云う
一世俗云武の筆く書と解武とは眼中を見て解武の和
日書を解武とも解武とも云ふ而用は神祇なるべしと云ふ
とを解武とは云ふ手代の反ゆんに白ゆんに解武なく
とも既に書と書は解武なるべんの中えをたくひゆんに
と書書とも
一筆白書上の俗世の文を尺ゑ武浮文を編名手和の武
平和家の文字手浮文を入て紙ゆく物しくいの紙し
武は人情をいふ今日のさのしをたくしまし拙くものの

所詮は浮世くらの姿ゆう系流の文字まはゆ文を紀文を
立文字はなく浮文を書をかくをおくをうふいひつけるは歌
俗の一字おくをかをいふ
一筆白漢名和の書白は漢字漢字を拙文を定家の紙を
而りの漢を定家の紙白を拙白を用ひ
侍るは拙文しまるく
一筆白雑名は浮名をいふは男女清く細ひ字形の
俗浮名を用ひ雑冊なしを物尺を和尺名を侍
手をくくを字形は書をくくを紙は編名を書て
自侍をくくをは文字の名をはゆ風俗をけるを級
又の侍を字は名を用ひをくくを筆の形を改めるい
一書を名を形の寸法侍をくを堅は表紙の三分二をくを横は五分

一ことさら作りなしたらん積みの附句の意にひとつ性をも定めし
一舞所に出て極るは八古来より季ある中に其季に定りたる句の句に
て動かしえ作る古来の季あるにもれたる季を撰み入れ物語にハえる
ひ用ひし初めは季の一をも標し出しさるんハ疑無きにより物なし
とかくに詠うたひの秋も古来の季なるはいとし見えて正月晦
日なれハ是季あらぬ定て其利の句に用ひし作るべし
一古来の俳諧集の撰者ハやくも俳諧集のうちなし他よりし好
みの集の詠をもこえて句を分を折るひとつかの侭れもあり
集め他の詠に於て其事の中に入まじりや其る事曰俳諧
其の名ハ和歌詩文史録物語の書ともに見て郷で見えしとかく
されハ其の作句の名付ならず人を見みたし 粟三なり月夕花の句
ひさしく積みの翁の松原芭蕉の句よりて其の樹雪などで浪花集

の附句を撰みとみなみ山と書き句日ニまれ和歌以為所なれハ古より
ハし浪化集と呼べしとなし
一翁常に此上手に宗因なくんハ我々が俳諧を以て貞徳の涎をねぶる
べし宗因ハ此道の中興開山なりと言へり
一翁曰今の俳諧ハ日々に工夫をなし席に臨でハ率爾として吐べしと也此
心得へべきことなし
一古来の句ハ門人の数のはかで句相互に成る事ハ大むかしかえつする
一々句を出て人ハ手本に示しかたけハ句にさの念を入るものに
候又一句ハ手つかく俳言なしよ他へしとしん此一句作
十七字一字もおろそかに置ずして俳諧ならず和歌の一諧
なり一句をおもしろきは作るへしとなし
一翁曰発句ハ後々にてもすべしとなし 本句を上げしと何翁酒堂

義て曰発句ハ決めてよく物二三ハ取集る物をいひとこゝろのをおさむへ
ようてよくつくへし
一 詠ふ発句ハ其合をすのし前句にれほし付よきをすむ人
有しらはやとし
一 古来ゟ決句句子自然といふ事又ハ文字の詩子詩歌のゆふたよふハ
ふまみそこし小船ふみをと前をおゆくこそし小船を浮
と他れハ句なのゆくとし古来ゟてを燃流まうふゆめし決句
古人ともを物やおまゐらんとよいをすやとし
一 前句発句ハ其ままさりしかく作れとし付句ハ三度文字出れすむ
うしハ付物とめとす中流ハ心付をとめとして今ハよつう 御青磬位
を以付くそとよしとそ杜年ゟいう那とし 御青磬ハ称しとハいふや
古来ゟ文字ホ附くれしとも云也をうるをまえをあれとてくらぬ

いひさしなる決の詩をゆけし語子他ハ押てよくし

赤人此名れはよふらう神ニ年す　史邦

有もさいつき合点よろくし　去来

決曰よつうよろみなひとゝろやそしに古事ホ三十棒をよう
れるる志てしふうと悦ひうひらう名をおもくハ由流ひとゝらと
よつうよろとつるいうす句化の内やすしてのとのとめよのさう
ひなれハ冷喉自然の附ふうて人さとしゆむるとつやし由る
もし赤人の名を押もしろやとゆくハ名をもさひつる幸ゐとして
とも然ハおそと名を流されふうとゐるよう合点ふろくしとと
おくつうゆく家味ひえしうるへし 御青ハ折ハひとくうそと理六
うれ様子組ま窓をうらくうね
身はうきたり此反方をたよ

此句を附けたる意ハ左の手にて太息をおつけたれ此
手にして左の力ありてかくの如くして語のひとつ一句して
おもむきのかくのとくかれハ其の俳諧の事となる和看破すへ
きし

一 萱草に空しき日を送るハ打破り
　いのちうれしき　撰集のさた

初ハ和歌の奥儀ハしらぬひとしれる翁白鳥と西行能因
なとの境界をたとへたまひしなれとも更に西行を付んハ俳諧として
只俳諧として付へしとて紛ゆへ山さぬ

一 旅人の虱かき行春暮て
　裾うらふく　許

翁曰いふさまの許で俳かなれとも

一 翁曰意ハいかほとつけてもよし 天象地形人事草木虫魚
鳥獣のあそひ迄疑なきやうになしとも

一 翁曰附物にて付ること当附と申なりよくして附物にて付る
事を心にて付るハ文字撫と申なり

一 翁曰一句も松もとより付る類ハ一景もんハ見せたる

一 花守や白き頭をつき合せ　去来

翁曰さひ色能あらはれたり

一 しのにならぬ身は門　去来

翁曰是の位よの法なればとも

一 [illegible]入る[illegible]の　路通

一 翁曰此句をみなすこし

一 翁近代の手法川をわたる今のごとく

代一代ごんや翁曰古代〳〵今の風俗〳〵五七まゝ又八八一変
ゆゑんなり
一文華曰長歌短歌ともに詠ずるは和歌曰歌のごとし八歌
もとよりこれをしらべ〳〵ゝ時々変遷すれども一歩
ゝ進ず長歌短歌ともに八詠ずるもの古今集
千載集ばかりとなり後世長歌なく短歌のみ用ゐる古歌
ゝ〳〵なれる長歌なく古人歌をなす不決予八按
ずるに長歌の例ゝ短歌ゝ如ゝ短歌八万葉集ゝ
ゝ〳〵これ二十一字し長歌といふ尺ゝ予世ゝ上古の歌八皆
ゝ〳〵長歌の作載しやれゝ三十一字れ作あり是を短歌成八
及歌ゝ〳〵長歌の歌ゝ〳〵ゝ古のれ八長ゝ八共代歌一
首成八二首ゝ〳〵長歌ゝいゝ〳〵ゝ既ゝ三十一字のを短

歌ゝ〳〵長歌ゝ〳〵ゝ長歌ゝ〳〵ゝ長歌ゝ〳〵ゝ長歌ゝ〳〵ゝ長歌ゝ〳〵ゝ
長歌ゝ〳〵ゝ長歌ゝ〳〵ゝ長歌ゝ〳〵ゝ長歌ゝ〳〵ゝ長歌ゝ〳〵ゝ
もゝゝ三代集以後代〳〵の撰集ゝ三十一字のゝ短歌ゝ不書ゝ
同一〳〵ゝ古の歌八ゝ長歌ゝ後の歌八短歌ゝ唐ゝ古今詩
ゝいゝゝ賛ゝ八代ゝ〳〵ゝ短歌の歌ゝ〳〵ゝ
ゝ長歌ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ長歌ゝ〳〵ゝ長歌ゝ〳〵ゝ短歌ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ長歌ゝ〳〵ゝ長歌ゝ〳〵ゝ三十一字ゝ長歌ゝ定ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
一正義曰ての歌人ゝ〳〵ゝ古今三代集ゝ祖述ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
翁曰ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

定家と隆房と作りてと貴之弱恒とよりさのるかるんの
一西行の西行今集よりもすぐれしかるべきかるんの
ゆえんなるべし去年しるしあるべきもの三年と撰者
一基一化方千かやうのもの俗ゆるかれ曰無之のあるべけど
見しるかやうのもの八とのの人いきしかるべきもの八とと
よしとしるもあるこの俗ゆるかれいつれも文章の
格法千杜子美今もよりもすぐれたるべきもの詩人のまねとやんの
ゆるかるべきもの八とのつれとしるべきもの
一本節間中院の家人八俗ゆるかれ曰西行と隆房の右大臣
なるべし
一未詳の古今集八とは命する古西行あるかれ曰定家八以
のなら西行ゆるかれとしるべきの家卿の撰別集のるんの

一成人間古今集の序と六義を説季吟俗話千六義をきくの
手義ゆるかれるのるかれ曰物ゆるかれ六義八詩のてのるべきもの義
ゆるかるべきもの八詩ゆるかれ一撮の意和かれ八物ゆるかれいまと六義俗説
俗話千ゆるかれ季吟と四しるべきもの季吟をそなへ本てゆるの
俗しとをく季の俗素をゆるかるべきもの俗ゆるかれ季吟
なるべきもの義をくまのしんゆるかるべきもの俗ゆるかれ
頌の内千俗ゆるかれ八物ゆるかれ風雅ゆるかれ
もの引ゆるかれ義ゆるかるべきもの二てのるべきもの俗ゆるかれ
論をゆるかるべきもの六義の俗ゆるかれ
なるべきもの義ゆるかれ
なるべきもの俗ゆるかれ
の二八ゆるかれ

一素堂云今の人ものをよむに伊勢物語を本とし
人麿の歌集八詩の三百篇のごとし好色の作載物語の
詩千古今の絶句詩の作又俗語のごとくに量也屋に
見を用ひるを作を虞舜ハ伝て尺れハ歌
歌集詩をよるハ好色の作をしるしよりいとん古今
集ハしら作ゆるれハ巻言ハ物語をてお
ものをくに好色ハ歌材をよるやおし千体載のごとし
くの物をよるをいとんを道日乱き作ようて作る入
詩絶句をよんと予は一さを義
一卯七月十五日上洛の作
芳草をもとめ山むかひ分けの海
翁の大津をかくをしるをさんとけの砂絶をを

作ようしに歌詩を作をもとをしをはやをもうをかくしを
さ本ををををるものの方ををのをんをうを大津をしを先文ををを尺を
十にをををうを歌をうを作れをををを人のの物をかを
多をををを世をを翁を尺をををに海日をを歌本ををけを
くをを海を里ををを人の歌を徹をを扇衣のゆをを
を五作を八物をを少を付て扇をさて尺を言
ひををををを
一琵琶の芳桂を広島集ものを作をんと海の我白をを衣作
生をを砂を我作をんを砂を立翁日秀八集作をんをを生を
をををを所芳八撰集作をを為をを人ををわを
俳諧八を紙を三を
一正月四海の方をを俳諧文をを言ひてんや翁日秀俳

[illegible]文の[illegible]ハ[illegible]哲の文を
[illegible]くしてわかく[illegible]文を尺と俗法文と異[illegible]
ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]俗法文とおなじ

一[illegible]を[illegible]ハ[illegible]を[illegible]文草と[illegible]て俗法の[illegible]
[illegible]例[illegible]ハ[illegible]事と[illegible]文草と[illegible]
[illegible]ハ[illegible]事[illegible]俗法[illegible]
草と山ハ[illegible]青山雲ハ[illegible]白雲[illegible]ハ[illegible]
一[illegible]ハ青物の小[illegible]
[illegible]
[illegible]情ハ心[illegible]

一式ハ古式[illegible]
一[illegible]ハ古書[illegible]
一古[illegible]
[illegible]
一[illegible]ハ[illegible]
一尺[illegible]ハ[illegible]
[illegible]
一[illegible]
[illegible]
[illegible]
一西[illegible]俗法[illegible]
[illegible]

ひろきを以百韻となし心を作らしめ聯の字義と俳諧は俚言を
我か姿の変化は今日世俗の言葉しく其俳諧は心を用ひて字
義にひとしからす是を以一転して字義をよく味ふへし格は中
古の俳諧にひとしく連歌にて定めてきくひとを易く見貫心
古て今は句を取たれは理にてて物によく見て更に離れ
れ中むかしの俳諧も大かたは付方をさたなして利口をかしか
其俳諧は前句の心を能く知てふちふち一句の上独り立会
物の情を探りおくさいたるさまをくし先のうるはしき織の染
色の移り行の世をみて一しかるに通へしれは連歌も上をまた
前句に走らすにや

船つなくいろは住よし浪の上
浜はにまかせてこそしつまれ

と付たるは上にいはみえて付たるにて前句のいはする一字の句にてそ
おもしろき作ものとて連歌なり

柳のいと縒しほる里のきぬしほて

次しの其へは句数きてまりて
とせるは句面俳諧付なれとも

秋よりの名残 紅葉の色
傷なるぬ身はすさましきうれ数

とあるは前句の韻字に付ふれ其句にてとふる不和らかひとや心
ふたは表されは連俳のきらひ中のむかひ今までの俳諧の一轉とし又下
西文字の上一面の句は付合にて付れし其文字なとかはし菊田まて前句は
前句に似たれしも前は歌の世界の心に連歌は連歌の古格の心に逢ひて其姿
よる是白のかくよく見て前句の体よく連歌古来の俳諧とし を

俳諧とうつさうハまてゐを宗とせすぬかゐあるへし俳諧
するものまてゐをもつてゐるとうつさうもむ白
うつハかをもつてゐるとうつさるべおるひとすくし
ゐるさ削一　て　こ　う　帆くしく
とうつさう
さくれうとうつさう次とうつ次印助
と付しまて成人ハ白俳言を俳さ者ものをとうつ書
社ハとうつてををを用ものを和言姿何とうつ付
うつとうつ上ハ年ハまて奇のをとハかり用ひさるやう言
なるまて人のひとうつ白ものをうつ茂白ハ俳をかふ白俳
ひうつて書俳を
花とうつ次　花や　松本ハ斧の　ち

とうつ白俳諧を持ものくをを事ハ斧かうとうとうみとうをよ
ハのをとうとうとうハ俳諧をなるくるとし又
神　頃や　内とも　高し　夏の　月
とハうつ白俳諧の茂白とうハ白俳諧をうつくうくうち内を
あとうとうものくをを言をうしくうのをうつとうとおうとハ
出花ハ俳諧をうくくうとうとうとおるひ如ハまてをなるくををの
斧しとうハをのをまて我のをを俳をうハのむをを俳をひくくを問
言をうををくを人ハ泊やをくくををうくうハ俳諧をいてうを白曰方
ハうん俳諧の言をとををををうん八をハをををくををハ和をう俳諧よ
ア白花ハ言の泊をかをとを俳諧をくくくくくハ俳諧をくくくくくをけをを
書俳の泊のををハハうハを言強弱ハ俳をまて言俳諧を論をん氏
俳ハ俳諧をうをる俳をうををくくを白をのをを俳ひ

又ある人吾宿へ来りて俳諧にまよふ人なり風雅なくてまた俳諧に
ゆるくふ人ありけり此二つハ心なり帯心所定の論ハ甚だひかくべし
一泉の鬼貫京武行の庵にて翁を訪申して翁に
見えしむ梅の本其の句を出侍て夜に此句ありて能〳〵よ
句なりしとて

余り咲きを梅の木と待る夜木立　鬼貫

と作ありし翁の此句の脇ありてわが此のたよりに二字の文字
と偽る空山ありて二の書につけし翁の句に

ましとしとこそ見えたる村雀

とつける句に鬼貫

六つもと上手も後悔して居る

と作すかへ一句ありしよりしく後更に世に知られる句作も句作
是訪へかろく咲かれ梅の白ハ翁曰此花の風情ある咲へ
好ふかと尊ひけるにハ鬼貫

田にも畑にも咲けるに守に此

と申せハ翁曰句ハ句論の時にして梅を賞べきなりとも
此一句のてりくり詩をしも評ていまへとてそれの事もと
云ひけれハ鬼貫

田をかりわけさかりすれ　咲春し

と申されハ翁にもすくるりて梅ハ咲しと云ふれと句論の
時ひとし又梅と云うにハ此より翁ハ杯云ふ
後日を用ゐる時ハ其後に此ハ又ら此外のの
とつてようふ秋もと三句ありめてハ一句にも梅ありけり
おもしけれと然ともへ鬼貫正本に句をゆつりし有る

よそりおゆ情とゆくてそへのし
と侍けれハ情を起しさる実体まて心さしを知りしめさむ
句そ何ゆ味てさそへつるの何ゆかりあらんる者の俳席八郎まて
起り是ハ誠にもとめて素はかりを深まりて心のむつひ定よりと
ならしき俳諧ふくひときまつひまへる文学まてはつくしして

御縁らよんと松風のよく

菊日是何まおもくと縁ある一句更に哉るて取合は松風の穴
ふくて縁ある一句の精まて此松風を觀ますへしこし思愛
再ひとしてみけしめて俳諧者ん和えの境を知らうらくて数ん
さらふれたく聖る正為又ゆるひして問ふすへしとさりとて尽
さそするむつ紅葉ふしきうる御縁らよひと松風の吹と流つよ
あるく附方更まゆかしきさゆつをましよしとすとらうる也

その夜ふかく菊日ゆるりとしにいへるゝ者の
素しゆかしとりて其の句を再三きハ堺をまてさるらんとゆ
ゆかりしるく者の魂を招くてそれをゆるめます一句の風情
すへて天つ人の長分にもしき龍の吹のぬえむくきうるしと
アとやきしもるれるにひし一つ下吉のる書めの流里圃亭に
くれ云ふ仙

御そそよふ薄の中に蟋蟀の声　　　　　　　　　佐園

とうるに

まうれつゝ人つらひむきハ泪　　　　　　　　　里圃

と付ふり此句の前し去るまよりも菊に一句まてし穴為日皆
ある句かくさらに中にいて萬の寸し御そとそ薄の中に此
境ハ何ゆかりのうるへし其ゆそらむ眼力まふ和し天付る

是別樂をはかりて句をしるす
とあれハ更に一句を結ぶ
次性の次いけを結ぶとき　言芳
と句を結ぶ時こそ人の情を尽すも
此句に一句をそなへる前の句の沿情し新新知るの
特れしなり

一石　ゆみし　かしらの　れ米　沾圃

とはさらん結んをれをそ人をいひあさハ沾しるるまま
次性の次いけての一句を尺る所れ去沾し千を結ぶ新新
をゆつ一千人の情を以一句の述千ゆつ人れる句代
ゆつ和を念なるをそと初下ゆ沾ゆる人ハ沾く意
さる人ハゆるゆといひ千ゆ沾ゆる八尺ゆ人の長ゆるる

沾徐ゆよれと　杜鵑の次をとをけるるなを
いもし問ゆの物をとゆ藤の墻の有ゆハ沾
ゆるしゆをとをとゆる村をゆ八沾ゆ尺ゆ
山物の家を家八ゆ千ゆ乱をるゆ清猪ゆハ尺ゆ
ゆをゆ　ゆれゆをゆれゆハゆるゆ日千ゆをゆ
乗物ゆ日千ゆき合をゆ物ゆ

沾ゆし　和倉の　勝千ゆ沾ゆ
とゆ句千

ゆは　物を振て尺をゆ　和ゆ
とゆいゆをゆ和今物変て猪ゆをゆ千ゆ人ゆ千ゆ
物ゆ人ゆ見ゆのゆ千ゆ乗尺ゆ眼力ゆ人ゆ　ゆ沾し
とゆ句ゆ五ゆ安千ゆられゆ沾人のゆ人ゆをゆ

[illegible]

[illegible]

以物をうつしたること　秋郎

とはるゝ人のしるしく降うる雪は花と自ら迷無形之
雪清明なるに雪をくりれと花なるひとりて八俗世外一高士
と人はるる親友の自のひてきをうけてうさへくるまうく一
持て一白千心とまるる力ゆる見を御音とうり物の付方
見夫人の舎新徳かしうとうとしは絵うるるとよ
相俗八うすしてうとうを人をうる自ひをうけを白ひから
心を持て白を持て走うまを力をとめてうかをを故身
とはてうおのはうしを和舎の付をを八御音を聲をうを走うう
俗世八物うを見をうをを心はゆうを一問をうを白をいうを
菊白見八おの白を招ををうをけをかをうはうをはををかを
物をの白をの花のををし名用ををを人をうをを八をの付俗を

物をうをの名用し変ををを名用を変物をを走をうを
を相俗世芸日し香心を俗世ゆうを自を白をの走るを
及をを自身を盛合を八自白自を白をを名用ををを白を
をは物をを俗をを俗をを走をを自を八朱俗を香をを及
及をを自白をの八物一のをををををを変をれをを
ひををををを用のををををををををををををを走をれをを
こを底をを少をを走八一物をを走をを走をを走をを
をををの二を美ををををを心を変を走をを走をを物を香
乃俗を狭ををひを朱を底をを大をを走を走を走を食
香をを香を走をを八をを走を俗を見を小を変を走を香を
句をを俗をを変を走を八俗の見を変を恨を非を変を走を
みを人を走を俗を香を俗の力ゆををれを大を走を物を食を

安くかの事をかたるに、[illegible]
[illegible]
[illegible]
一説に聚間抄に、[illegible]
[illegible]
[illegible]

世一代集の対八女の手柔とゝりけるゝ風雅と文の古今新古今
〳〵千代〳〵の風雅をあつめ世ゝ代〳〵の風雅の
さとうゝさるゝ所ゝ永ゝ〳〵〳〵〳〵集ゝゝゝゝゝ文八ゝの
そうにいとゝゝゝ俳諧とゝゝ同撰なるゝ〳〵此ゝ良宗の公
俳集のゝゝゝ花ゝ月ゝ毛の文ゝゝゝ米ゝ俗の文ゝゝゝ俳諧
文雅の集の古人の句ゝゝゝ集のゝゝれ八ゝゝ歌ゝむ一発抱
ゝれ八俳ゝゝ以俳諧ゝゝ歌ゝ集ゝ俳ゝゝゝ名ゝの雅ゝ
俳諧ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ良宗ゝ雅諧ゝゝゝゝゝ人の上を
以歌ゝ二ゝゝ一ゝゝ問ゝゝゝ八撰ゝ千ゝ是非ゝゝゝゝ作ゝ
ゝれをゝゝゝゝゝゝ人ゝゝゝゝゝ千人の代ゝゝ
同ゝ信の句ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ八ゝゝゝゝゝゝ句八ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ上ゝの句八ゝのゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ俳ゝ流俳のかきゝゝゝ八集ゝゝゝ句ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
俳諧の一流の俳ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ良宗宗因ゝの句ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ八俳諧の俳ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
俳諧ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
俳ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
俳諧ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一ゝ宗ゝ翁の高弟ゝ徐仕一ゝ付ゝ問ゝゝの集ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

一 [illegible]

一 秋の月八今年ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一菊を保護百の財小枝の案内を世間の山[illegible]
[illegible]
[illegible]
千財小枝の白千

菊をて かれつゝを[illegible]
[illegible]

一尾張国八江州大津の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一　諸高千本村之のうや大根引　つゝき

作ら之ゆ田大根引ハ是ゝ千年ゆ大根引ハ是ゝ

一　菊田清左衛門きくのハ殿取りとゝ　いまゝ

千年ゆハ作ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

香ゝ香白のゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

天竺ゝ黄二人　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

附老ゝ黄の方ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

又ゝ附ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ心ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

是ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

もゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

[illegible]桃陳を引きて八月九日深川の庵をたくられ[illegible]
契約のくしめ一度[illegible]桃陳[illegible]桃陳いとはるる
為人貴白持をふかくしてしかもやさしく桃陳[illegible]四三白
[illegible]

七月十四日の夜為四金谷を過て大井川越ける　大井川

聖夫しるべして越ける　大井川

十四夜なれば月[illegible]秋の風

うけてしかのみかれけるかしの塚の苔

秋近くいとふ人とてもあるものを

この命なにかはしらつゆの玉

[illegible]て田能本[illegible]の山[illegible]る大[illegible]千分清水桜

[illegible]大井川の白八千年の[illegible]

[illegible]の[illegible]の白[illegible]

[illegible]

[illegible]

他門にて許る一人も度歌式規を門弟に授と云ふ事を通りて
し見る所の本字今日迄に大きなる悔ひのある撰集と云ふ
て許る事及ふ人なきもしと迄なりし終に其事不審無
つくしし思ふに俳諧八いひ捨と云ふ事なれ共俗に曰俳
る俳諧と普る俳諧と人数合と云ふ是れ俗諧と許る能
諧なる故に数合すと云ふ式一定なる力をえて戯協する事なる
されハなる射所の作しめ迄なる事なる心中大なる迄なる式俗一定
信なる所力をえなる事なる和歌なる以ての普る方一
点なる点白百四五十なる事なる点なる点白なる点なる点なる
なる所の白なる濃淡の点なる点なる点なる点なる点なる点なる
白なる所なる点なる点なる点なる点なる点なる点なる点なる点
沙の字本八普る也沙本の絵本かゆくてんたのし

なる八年完俳諧八いひ捨し決定しなる又問なる事なる俳諧と
普る俳諧と数合なる事なる并沙の風俗なる事なる風俗なる
なる事なる迄なる不審なる所なる沙曰なる俳諧なる事なる
なる俳なる事なる事なる沙なる俳なる事なる俳なる事なる
なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事

京吉の俳諧の血脈を伝へんとしたまへるに
ひとしく俗をとるをおもとし給へり と宣へりしを八退去せ
ば手を拍て打ち時汐の戦詩を曰夏光詩を射て支
手の大空をとるに業をのこしつきの光をひかりとし八
汐曰これおくの人を射て俳諧の道をもとむ歌めえて道指
北をを附さんとすと異てしねこにて蹴毒をえて百猛
を指うえるる人八作るしを業の作るるに人世をを
かしきと異八これ八志ひて道をもとむ俗止をとりてをの
定八性癖にしてをの大を物をかけるといへと者て勢を
人をとし是八是をもうたをけるとをれ八をを入るし道のす
くれるるもの八指まれしをもとをとをとを人る
を是をもうをもむをとをとを十人をとをとをを

事いををし一を編しををとをを汐曰道のををれるるもの是事
一をを是一百太を氏道を物をの人を作る八指食をををれ財宝
を歌を加をる人を是二百四ををを人ををを人ををを三十七を
三百いををるをををを八道をを行しをを是四を貪物を
を物をを等しをる人をを作を百夫を物をを人を
夏のを作穫れを是五百作を百夫を物をを人を
文言をををを拾頃をを人を人をあを是古を氏古の
をの物いをる人をれを二百三八道ををを古の不是をしを
人をれをる筋を定ををを筋の物きをる作業
氏度俳諧の度をををを言を門弟の中を度ををを
明物を物氏時をををを氏を度を入を氏八
猿みの作度物を古今を編を底のをけをるるの八新古を

[illegible]

言てうの句の時更句

[illegible]

きさし時酒屋の句

[illegible]や 根

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一[illegible]八一反一匁と[illegible]

一[illegible]の[illegible]の一[illegible]減後門[illegible]の[illegible]

[illegible]八[illegible]

一[illegible]八[illegible]

一[illegible]八[illegible]

一

[illegible]

一 世角[illegible]十四日の夜の[illegible]

[illegible]

[illegible]

一共角云ふ物の鉄砲を作る此時の見えるまねの事
のとくとくとく

若扇をさしかゝふうん人のすがたをつゝ　芭蕉

ゝゝゝゝ鶴ゝの山又貞徳宗鑑ゝ武の画像ゝ高屋ゝ鶴ゝゝ
ゝゝゝゝ手ゝゝゝ春ゝ前ゝゝゝゝゝ鶴ゝゝの像ゝゝゝゝ
ゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

三羽ハ風雅の天ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

月ゝゝの見やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一翁ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一菊九月九日古て曰一寸のうち長生の三五ゆゑん人八仙老
十日千年ふる人八名人し
一詩に云流の和及ら牛ゑ仙葉といふもの来て不老仙きんて
を受也年封

新人社 三角千ゑける 祖代うれ
ゝ三日もし新人の接接千扇八まへ流と楽いて春の比
なれ水と夫合行ゝし時日菊千詩ら侍ゝ侍ゝ接接の
侍新年ゝ生ゝ生ゝ

一詩に云菊日黄日三月ゝ八一年のおくまゝ生ゝ生ゝ
ゝ生ゝなゝゝゝ

一詩に云菊日黄日三日の花ゝ又日黄日しゝ八
元ゝ明ゝゝゝゝ詩の大方黄日の日ゝ八ゝ生ゝ

一詩に云一ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ黄日侍ゝ侍ゝ菊を抜ゝ
ゝ侍ゝ千ゝ侍ゝ千ゝ侍ゝ四ゝ五ゝ三ゝ菊の侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ

人ゝ社 仲ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ 桃陳
菊 ゝ 再ゝ ゝ ゝ 成 菊
千年新芝蓮ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ財ゝ日ゝ人ゝ人ゝ
千ゝ千ゝ千ゝ千ゝ山嶽の一ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ人ゝ生ゝ念の
次ゝ水ゝ新ゝ山ゝ山ゝ大ゝ山ゝ山ゝ山ゝ起ゝ千ゝ日ゝ成ゝ
一ゝ字ゝ生ゝ生ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍

と言へり やうに見侍る
風と称し 文字 作れども 舟きしるまとこころの七文字 尾張
ちう上の七文字 尾張 湖水の一言の一 まとまりて作る
月の外 とりさハぐ とられ 人 これ 涙 と
くれる人 所 出 ちうしいを八月をつかふる 夜の
みて 善悪の 別 なく 朝の 泥 弱 ちうて 手 取
はちうして 扱 をみて よ 慢 と 言 作る
一作に 変 言の 尾 ちうに 人 物 手 文 言 を 教 いはと
李白ちうて
はらちうおそ をけ きとちうて 人 く 文 言 物
子 菊 作 弟 子 迷 舟 や と 文 字 作 文 作 式 白

門人 ちう 人 しく めて 物 式 弟 白 ん 地 ちうて
言 つむ 上 の 枝 の 雨 と ちうて 文 字 を 教 む 情 を 愛
しく 葉 ぬ て 下 言 や と 言 文 字 を 作 ちと 作 ちの 一 用 し
文 言 と 作 の 文 子 窟 島 と 物 ちと 出 ちと ん 物 ちる 弟 ちう 人
しと 文 ひ し と 更 退 て 書 物 すと 言 文 言 八 九 合 を
物 ちう て 言 と と 文 言 ん 物 の 菊 の 画 物 を 作 ちと ちう
一 作 盛 を 作 ち 時 菊 や ま れ し 八 情 て 前 さ 合 と 紀 白 八 物 と し
時 と ちう て の 言 あ し な れ 八 一 句 ち 言 文 と 作 ち と 文 い 合 ち う
ち し も 弟 し ち て
一 情 盛 を 風 雅 八 き ち の の 文 作 ち と 風 雅 な ち 物
き の ひ ち て し や と 者 と 作 ち と 菊 四 言 ち う と 白 の 姿 と ち う て
い て 白 と 弟 し て 作 ち と ち れ 人 ち て 文 言 も 有 て し さ れ 八 風 雅 い

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二番目まきの物ハ今録きゝ目すくなく烏ハ全く俳諧し
さゝめごとの物ハ俗語を尺牘にしるす白ハ詩に俳諧の
語を尺牘に入るゝ事なく俳諧し又雲月や雪の つく
りゝハ物ゝ哀を俳諧の外 花の白ハ心
をく俳諧し 紅葉もん 有 千分の白の 俳諧 ゝ
和一篇 おの 俳諧
一去 芳 俳諧 上三 俳諧
千 千 俳諧 俳諧 俳諧
句 句 俳諧 俳諧 俳諧
句 句 俳諧 俳諧 俳諧
句 句

しき八女子の詠れし代とは古人用いされ八代の者
そやはそなりて移り是とおもはれしへつ〻きあるしさき今の
ろの八幡宮りとよくしく元八大こと〻さうろ一但志賀の門出八
ちなりて作しさ信用して主命のひそう秀門のはこと者
八なまへしと宣り
一去芳意のこと後日しに菊田松りしよう二日陸奥八用いさるも者
の白八毛の詩を為を集め玉手詩をつて玉白と外て心の毛
は滅そおきハさるし今思ふ者おして大切のこと心をよく
者ふれそのうみ家物家紋のけまして一白うして正と伝なるこも
ゆふれ世なわし門人くと伝して一白うて墨てこと者ふん
うとし又武射日本の白毛と毛と月伝ふと白の伝八
毛の白とはて者ものとに毛なくしと見ふ白

のみしつ〻て毛とと及てふ武式ふ此伝はけふ
きふれと毛のこと八分て世世の家臣と毛ふ
一松の子成俳者と菊田生家子松の白三白つき二白ふすな
よし多くゆふと八神社和歌毛居者の白松ふて毛ふ
和行今松毛歌ふし又一ふ此ふと松伝の白八伝ひ
ゆ尽ふしすしとやと移ふて毛坂ふふ淀の川舟ふ者心
ひ松の伝ふあるやれと毛ふて毛ふ毛ふ者ふしと
一菊田生ふ毛ふ一すちとしめ人伝雅ふ元来ふしと白三ふ
一菊田ふ者ふ毛ふ用ふこと武式ふ毛ふ古今此ふ伝者と用ふ
ふうふとしし八代集八古今後撰拾遺後拾遺金葉詞花千載
新古ふこれ後去伝門伝新新撰続後撰二代を加て十
代集ふ和ふ毛ふ又堀川帝度の伝毛ふて八十代の伝の

集ゝ[illegible]たゝの集ゝ今ゆゑ[illegible]化さけ性[illegible]れゆる
ゝ[illegible]ゝ

一菊日後の白ゝ[illegible]先白子系白等歟ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
白を引[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ふゝ大[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ

[illegible]

一文章の事 菊田惠伯云序文序由序来序内序と云
三部に分る由序来序は是より先の事を云内序は千古
此内の事を云序三部を一つに云序跋序と云
序と序者と跋は序者と跋は序者を新
為しくさるふまくを序とすると跋序
くさくさ事号有と云字七字を八字に字の抜し七五三に

此の例に倣て古賢に對ひて死敵を亡事を至時は古事
出分明に出れば生敵おのれ対国者し物を千代と和と
明しれ深き事を物語るとし況は千物を指すの心し
抜は序跋と同し元の序のちのふのみ
序は本にの序を同し元のちのふのみ
く賛し山次を廣義は次の義を趣る文章を時四五字し
て古大くらの抜れるを宜しく了
一古芸と技能の事は古韻古式し五十韻古仙と孔明の物し連歌の
古式は表式句多歌の書六句月七句を表書表を一年て表
門名和一は七七清名連歌は表
十句の俗を古八句の俗二句を表を表きしの物の歌連歌
千人を化法を芸を連歌を所虎兎女さ

歌書の物と題して俗伝ふる思女ハなうてゝし就角ハ若ふ
そ分人と歌よきる之てゝなるの歌ハ用捨まゝ一百約一万
ゝ

一去芳恵の詞述懐の歌後ゝ云ふ白ハ表の内いて伝ひ
ゝ
ゝ
ゝ

一菊日發句のうの八一すぢの流れハ細川ハ老を忘れ八雲御抄
ゆゑ伊勢物語の日盛りとあるを佐よりもとをすとあるを言葉
を付る古芳を菊八恨歌の發句かろもとをみれとも時代を
よくくをさのうや付るに又吉事ゆゑ新米の香を樽に焼さ酒
天の呼る遁悼とゑ〳〵ふ冠科船中ゑ〳〵ふ志ひむ浪風
布の新屋ゑ〳〵ふやつうひをゑ不具の呼一ゆゑ屋合のおもひ
めゑ〳〵ふ發句のみをかきぐのそやはるくしとも
一菊日船八摩ゑのかをゑ言ゑ〳〵ふ尾ゑ〳〵ふ
富發句ゑ〳〵言八花實ゑ〳〵ふ接拔半一年發句ゑ〳〵ふ服も
ゑ〳〵ふゑ〳〵ふにゑ〳〵ふ接拔を付るし服尊ゑの句ゑ云
ゑ和名抄しを用紀のゑのしゑゑ句ゑ〳〵ふ接拔の心
なゑゑの歌ゑ發句三月ゑ〳〵ふ京物の射八狙ゑ〳〵ふ歌

をゑ〳〵ふ見八ゑ〳〵ふ歌の習ひし俳諧ゑ世やつゑし
一菊日發句を俳能歌ゑ和一事ゆゑ知ゑ〳〵ふ狙ゑ〳〵ふ
たゑ〳〵ふ詞をゑ〳〵ふやゑ〳〵ふ但の狙ゑ〳〵ふの雪一直ゑ
ゑ〳〵ふいふ八狙ゑ〳〵ふ〳〵ふ有〳〵ふ出發句ゑ〳〵ふ射付遠
付歩源氏句の歌ゑ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ一發句をくけて句合
ゑ句を歩源氏ゑ付るゑ〳〵ふ句ゑ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ八文
字屋ゑ〳〵ふし〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ一遍
射合詩ゑのゑ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ
ゑ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ

一菊日第三八大付ものと書き替しさ長寿と菊のもて寿
祝ひ所宗能より此拍式と考用さ通ひし物ひの如きの歳日
此祝八第三えねるまるまる矢ひと古来より物ひの日二日古所の
筋八ひひひひのくひまし日中と押字有やいつ伝かたの数
又日ようと押字なくさるゆり一字くもしをんらんの数
なり伝菊の歳日の第三ようまる菊さひと学ひ出て見伝定
の伝所ものをひくし伝の如ひのさひひ日の定ひひの数ひさひひ
定ひひもひと伝ひ通ひしひにひ伝菊若しひひもし菊を
きひ筋一文字菊ようは菊日無ゆり古法口伝ひひとし一
説古書と伝ひ八船の日数字菊ひ伝帳ひと文字菊ひ並ひ
ひひと菊ひし拍ようと人ひし菊八第三文字ひし菊ひ伝の
八並人ひ伝ひ学の菊ひとひひ見伝見の習し第三八物ひ

ひひ伝ひひれひも船の日ひひ伝ひ遠附方の付方の日の
八第三ひし物ひひ及ひひし歳日見形拍方の物ひし船
ひれひ並ひ付第三ひ天見を物ひひひれひひ
ひの日

一四日八ひひ四日めひて物ひて安くこのひもひひ
菊日おひひ八四日めの物ひ伝ひ拍ひひ伝ひ日中と伝ひひ
ひし古事一日伝物ひひ物ひ夫秋の季ひ古四日のひ
花月の句をひひひと伝ひ

一菊日ひひめ七日ひひて古説ひひ七日めひ同一心伝
ひひ第三ひ物一所上の日ひと伝ひひ第八伝ひの伝ひ伝
見ひひ第一同字を表ひ物ひひ伝ひ物ひ伝ひ
ひ物ひ菊八日の一伝表見異し学ひ伝ひ八来ひ表ひ物ひ古説

所の四月めきたりて八月の中ごろ桜花をかざりつくるなり
きるこし俗語に世の人なし代の白きをくるまとなりて及びまたは元をば
是ばかりの花とらし寄の赤白を秋の中旬に開花す一定の花は
むつかしき業にて書記に称しておりこと情もし俗語にまされ
一月の定めなくて行ずとも五十日ばかりにて咲こと兵子
ゆえたかしの無きものなるこの故八月に咲しかの地なし
月の代月の字なくて月の字なくて合ふ俗八月に咲花は三度咲
仕方人しの花を咲ゆるくしと言う
一毎日月八上の白桜ばかりにて花月常月の白桜ばかりにて
下は咲ゆるくは是月花八秋にて貴の用まるはかりに咲白
ばかり八月秋に代春にて咲白桜
と新式なり

一毎日春に月二つ咲ゆるこし俗八月数八つし各の春八中ばかり
月の花の下に八花四季の四つの白二白を定めさハまれも
こるようなるのもとし
一五月に黄花の白あるは人の付合の又千一百の花八桜に菊牡丹なし下
やうしに仕立正花にあるはしたるに木にて咲ゆるこ
の或八正月に咲こと尺又九月に咲ゆること白ばかりに
海日の月に咲八外に白八那にもしなくしたるに各本に咲
しこと花にくるくること正花にもこと八桜のこの白のもの秋に春
の花にもこと見ものもし正花にもこの白多くなる黄こと
常花の時代にして百韻花三本し両一にして宗長の時に春白
以花一本百一ち勅語に常度ら美ばかりて花四本白二ちに
常ら付る書の式とおくこと

一菊日蓮一所のものと和のごとくかろしとて白ふみを進
らせたまふ

一菊は梅白く付うるはと古院ゆく今一白と朱と一ゆ無さん
こんもと文を遣て第至ると出て歳白を年と春を のすると
ゆく〳〵和の一所と梅香の白ゆく八梅白と菊とすく〳〵歳白と
をくへとと性むも白いの花をて春を白ゆ梅
白ゆ春をとくとゆすく〳〵をくたとく春を及ひてすく〳〵いつ
まの春をとくと梅白ゆ白ゆくゆくゆく

[illegible]方ゝ[illegible]合サ八百万[illegible]の[illegible]
[illegible]ト一[illegible]

[illegible]お[illegible]の[illegible]を　一　柳元

[illegible]一門[illegible]